

# SHOW HEY シネマルーム



Data	
監督・脚本・台詞:	フィリップ・クローデル
出演:	クリスティン・スコット・トーマス / エルザ・ジルベルス タイン / セルジュ・アザナヴ イシウス / ロラン・グレヴィル / フレデリック・ピエロ / リズ・セギュール / ムス・ズエリ

## 👁️👁️ みどころ

『イングリッシュ・ペイシエント』(96年)の美人女優が、冒頭にみせる「ひどい顔」はインパクトが大! 15年間も会っていない妹と手さぐりで距離感を埋める作業が続く中、ムシヨ帰りの女が「私はここにいる」と言える日はいつ来るの?

淡々とした会話劇の中で描かれる人間観察力はさすが著名小説家の監督デビュー作だが、なぜ彼は小説ではなく映像で本作を発表? クライマックスで明かされる「子殺しの真相」を含め、切なさが胸がいっぱいになるが、たまにはハリウッド映画にない魅力をこんな作品で!

## 原作が先? 映画が先? ところで本作は?

原作のある映画を観る場合、原作を読んでから映画を観るか、それとも映画を観てから原作を読むかという議論がよくある。そんな場合「映画より原作の方が良かった」という声が多いが、映画は約2時間にまとめなければならないという制約があるのだから、その声はほぼ妥当? まれに(?) 原作より映画の方が良かったというケースがあるが、それはストーリーそのものより、映像の美しさや俳優たちの演技、表情などが目に焼きつき、また音楽が耳に強く残るため?

ところが、本作に限っては原作が先? それとも映画が先? の議論は無用だ。なぜなら、本作を監督・脚本したフィリップ・クローデルは有名な小説家であるにもかかわらず、あえて本作を小説の形で発表せず、オリジナル脚本による映画の形で発表したから、原作は存在しないからだ。そこでポイントになるのは、なぜ小説家のフィリップ・クローデルが、

小説ではなくあえて監督デビュー作となる映画で本作を発表したの？ということだ。それについてはパンフレットにも色々書かれているが、それは解説者の一私見。あくまで、あなた自身がそれをじっくりと考えてみなければ・・・。

## 女性の魅力を封印し、女優の魅力で勝負！

本作で2009年ゴールデングローブ賞最優秀主演女優賞などにノミネートされた1960年生まれの子イギリス人女優クリスティン・スコット・トーマスは、私が映画評論を書くきっかけとなった名作『イングリッシュ・ペイシエント』(96年)に人妻キャサリン役で登場した美人女優。

私はその短い評論の中で、「昔観た『誰がために鐘は鳴る』や『風と共に去りぬ』などと並ぶ、名作中の名作である。アカデミー賞12部門にノミネートされ、作品賞、監督賞、そして助演女優賞など、9部門を受賞した、1997(平成9)年度の、間違いなく最高傑作である」と評価するとともに、「この映画は、予告編を観た時からすごいと思った。スケールの大きさもそうだし、私にはいつものことだが、人妻『キャサリン』を演じる、クリスティン・スコット＝トーマスの魅力。予告編で見せる、上品だがちょっと過激なセックスシーンだけでも、『これは絶対観なきゃ』と思ってしまった」と書いた(『シネマルーム1』2頁参照)とおり、『イングリッシュ・ペイシエント』におけるクリスティン・スコット・トーマスの魅力は相当なものだった。考えてみれば、『イングリッシュ・ペイシエント』公開時のクリスティン・スコット・トーマスは36歳。それに対して本作は48歳と既にひと回り以上年をとってしまっているからある程度の容貌の衰えは仕方ないが、本作冒頭にアップで映るクリスティン・スコット・トーマスの姿はあまりにもひどい。クリスティン・スコット・トーマス演ずる本作の主人公ジュリエットの顔には何の化粧気もないうえ服装も相当ダサい。さらに一人でタバコを吸っている姿をみると、いかに内心イラだっているかがよくわかる。もっとも、その直後にジュリエットを迎えにきた妹のレア(エルザ・ジルベルスタイン)との会話で、ジュリエットはたった今刑務所から出てきたばかりだとわかるから、それも仕方なしと納得できるが、あんな美人女優がここまでの汚れ役をやるとは！

つまり本作は、クリスティン・スコット・トーマスが女性としての美しさで勝負する映画ではなく、女優としての魅力＝演技力で勝負する映画だということだ。それをしっかり認識しながら、鑑賞したい。

## ストーリーの外面は、ジュリエットの社会復帰の姿から

ジュリエットがわが子殺しの殺人罪で懲役15年の刑を受けた女性であることがわかるのは、福祉事務所の紹介で面接に行った際の工場主との受け答えのシーンから。刑務所から出所し、やっとこれから社会復帰への道を歩もうとする人間に、犯罪内容を露骨に質問

するのも変だし、正直な答えを聞いて怒り出すのはもっと変。だって、それなら最初からそんな人間の面接を引き受けなければいいのだから。ジュリエットが2週間に1度警察に出頭しなければならぬとされ、担当官のフォレ警部（フレデリック・ピエロ）と話をするシーンを含めて、本作ではイギリスにおける出所者の社会復帰への対応方法がいくつか描かれるが、その日本との異同は？私はあまりその方面に興味がないので全然知らないが、そこらあたりは専門家のご意見を伺いたいものだ。

前述の工場主の言葉がジュリエットの社会復帰を妨げる「キツイひとこと」なら、ジュリエットを「招かれざる客」だと認識しているレアの夫リュック（セルジュ・アザナヴィシウス）もジュリエットの社会復帰には非協力的。レアとの久しぶりのデートを喜んだりリュックが、プチ・リス（リズ・セギュール）ら2人の子供（養女）の面倒をジュリエットにみてもらおうと聞き「自分の子を殺した人間だぞ！」と血相をかえる姿をみていると、それがモロわかりだ。

他方、秘密めいた女性に興味を示す男はどこにでもいるもので、それが本作では、レアが働いている大学の同僚の研究者ミシェル（ロラン・グレヴィル）。レアの周りの男たちは大学の研究者ばかりだから、レアが信頼している男サミール（ムス・ズエリ）もいるが、変わりモノも多いよう。ある日、サミールの家に多くの同僚たちが招かれた食事の席で、一人のお調子者（？）がしつこくジュリエットの過去を詮索し、問い詰めてきたから大変。世間の狭い大学の研究者には、酒が入るとこの男のように場の読めない人間に変身する男がいるものだ。困りきったジュリエットがその場で答えたのは、「殺人罪で15年間刑務所へ」という正直なもの。これが気の利いた冗談だと受けとった一同は大笑いでその場が収まったが、今やジュリエットを本気で愛し始めているミシェル（ロラン・グレヴィル）は？

こんな風に、本作のストーリーの外側はジュリエットの社会復帰の姿を軸として展開していくが、社会復帰が容易でないことは歴然だ。

## ストーリーの内面は、姉と妹の会話から

本作は『アバター』（09年）を代表とする昨今のド派手なハリウッド映画とは全く異質の、淡々とした会話劇で綴られる静かな映画。唯一の例外はラスト近くに至ってわが子殺しの真相が明らかになった時のジュリエットとレアの激論だが、それまでのジュリエットとレアの会話は淡々としたものの連続。したがってハリウッド映画に馴れた若者には本作は少し退屈かもしれない。しかしまず第1に15年間の空白を埋めようと懸命の努力をする妹レアの姿勢に注目したい。小さい時は親から「姉さんは死んだものと思いなさい」と言われ、大人になってからは自分でも「私は一人娘」と言ってきたレアは今どんな気持で夫の反対を押し切って自分の家にジュリエットを迎え入れているのだろうか？他方15年間のあちら側の世界からこちら側の世界に戻ってきたジュリエットは心の空白をレアとの会話と生活の中でどのように埋めていくのだろうか？私が驚いたのは、カフェで「なぜ俺

の顔を見るの？俺が欲しいの？」と言われた男と、ジュリエットがあっさりホテルでのベッドインを果たすこと。私には女の心理と生理はわからないが、そんな行為もジュリエットにとっては1つの社会復帰？そしてまた、「私、男と寝たのよ」とあっけらかんとレアに話すことができるようになった時、ジュリエットとレアの距離感はどこまで縮まっているの？フィリップ・クローデル監督が本作を文字で表現する小説ではなく、映像で表現する映画として完成させたのは、そんなジュリエットとレアの会話から2人の微妙に揺れ動く心理と再生の姿を表現したかったから。もちろんそれには名優が必要だが、クリスティン・スコット・トーマスとエルザ・ジルベルスタインはまさに適任。ジュリエットとレアの会話から描かれる本作の内面をじっくり鑑賞したい。

## 8歳の養女プチ・リスにも注目！

2010年1月12日に発生したハイチ大地震は大惨事となり、さまざまな被害を生んだが、その後の「養子」の増大もその1つ。これは、私がインド人とバングラデシュ人の2人の子供をチャイルド・スポンサーとして支援しているのとは大違いで、実質は悪質な人身売買だから大問題。

本作におけるジュリエットとレアとの会話には、「私があっちの世界にいる間、あなたは私のことを忘れていたのでは？」というジュリエットの質問とそれに対するレアの答えなど、たくさんのテーマがある。レアがベトナム人の女の子をなぜ2人も養女にしているのかも重要なテーマの1つだ。これはフィリップ・クローデル監督の私生活を反映したものらしいが、レアは夫リュックとの間に子供が生まれなかったため養女をもらったの？それとも・・・？また、なぜベトナム人を？そしてなぜ2人も？そんな話を含む微妙な女同士の会話はレアの生き方の本質に触れるものだから、しっかり聞き取りしっかり受け止める必要がある。

前述のとおり、本作のストーリーの外側はジュリエットの社会復帰の姿から描かれるが、そこには無邪気なおしゃべりで大きな影響力を与えるプチ・リスの存在感も大きい。8歳の女の子らしいストレートな質問は、時にジュリエットの心にグサリと突き刺さったはず。リュックやレアたちは大人の知恵でそれを適当にはぐらかしていたが、さてジュリエットとプチ・リスの間には、おばさんVS姪っ子としてのいい人間関係が形成できるのだろうか？そんなレアの養女プチ・リスの役割にもしっかり注目したい。

## 懲役15年は重い？いい弁護士がついていたら？

本作のポイントは、ラスト近くになってある偶然から明らかになる「わが子殺しの真相」。裁判では夫がジュリエットに不利な証言をしたにもかかわらず、ジュリエットはそれに対する反論を含めて一言もしゃべらなかつたらしいが、それは一体なぜ？本作の筋には全く関係のない話だが、弁護士の私としては、母親によるわが子殺しの裁判でなぜ弁護人はジ

ジュリエットに証言させることができなかつたのかについて大きな関心を持たざるをえない。殺人罪の量刑に「動機」が大きな影響を与えるのは当然だから、ジュリエットの弁護人となった弁護士はジュリエットに対してそれを質問し、ジュリエットの量刑に有利な事情を法廷で明らかにする義務がある。それは、弁護人に対して被告人が口を開かない場合でも同様で、その場合は関係者からの聞き取りを含めより一層の努力が必要となるわけだ。しかして、仮にジュリエットの裁判でい弁護士がついていた場合、本作で明らかになる程度の「真相」はある程度推測をつけることができるのでは？

本作の問題提起としては、懲役15年という判決はジュリエット自身が、そしてジュリエットとレアの2人がその空白期間を埋めることができるかどうかという意味で最適の期間(?)だが、もし私がジュリエットの弁護人であれば、もう少し判決の刑期を短縮できたのではないか。そんな風につい思ってしまうのは弁護士の宿命・・・。

2010(平成22)年2月12日記

## 毎日サウナ生活は、都心居住のおかげ！

私のフィットネス生活は平成元年から22年間続いているが、今年5月からは「ほぼ毎日サウナ生活」が実現した。それは、北浜駅の上にコナミススポーツクラブ北浜がオープンしたため。会員資格は多種多様だが、私は月額6300円と1番安い平日夜会員を選択。利用できるのは午後8時半から11時までだが、私にはこれで十分。というよりこれがベスト。なぜなら、まだまだ現役でたくさんの事件を処理しているうえ、昼間の試写室通いという2足のわらじをはいている私は、昼間仕事をサボってサウナに行ける身分ではない。そのうえ、毎日曜日には高額なホテルのフィットネスクラブに通ってテレビを見ながら15kmも走って(歩いて)いるのだから、平日の仕事帰りにサウナに入れることは何よりもありがたい。嬉しいのは午後11時までオーケーなこと。これなら10時

前に入館し、サウナで汗を流しTVでニュースを見ながら着替えをして自宅に返ることが可能。ホントは30分間でもプールで泳げばもっといいのだが、それは今後の課題。事務所、サウナ、自宅の移動時間は自転車で約5分だから快適そのものだ。こんな形で夜10時から11時までの過ごし方が定着すると、夜の会食後のサウナ、夜の試写会後のサウナも習慣化してきた。そのため近時は皆勤賞の週もざら。正会員として同時に入会した妻は昼間も土曜日も通っているから、わが家の風呂はほとんど不要となった。そのうえ「タオルプラス」のサービスによって月千円で大小のタオルを毎回貸してくれるから、健康効果のみならず経済効果も抜群。こんな風にほぼ毎日サウナ生活を満喫できるのは、都心居住のおかげと感謝！

2010(平成22)年6月3日記